

〈資料〉

保育の場における虐待の理解と対応

How to Understand and Care the Abused Children at Preschool

浅 野 房 雄
F u s a o A S A N O

1 はじめに

子どもに対する虐待が急増し、社会問題となっている。児童虐待は時おり死に至る悲しい事件となることの他に、虐待によって傷つけられた子どもの心は後々まで癒されることなく、その後の生活を困難とさせる。子どもにとってつらく苦しい虐待を防止し、また、不運にして虐待を被ってしまった子どもの心の傷の手当を真剣に考えて行かねばならない。保育者は乳幼児にかかわる専門職として、保育の場において子どもの虐待を見逃すことなく発見し、関係機関との連携のもとにその対応を講じなければならない。そこで、虐待の実態と実際を知り、虐待を早期に発見し、対応を適切に行えるようその基本をまとめることとする。

2 虐待を知る

(1) 虐待とは

児童虐待の防止等に関する法律（平成12年制定、その後一部改正があった）第2条に、児童虐待の定義が次のように示されている。

（児童虐待の定義）

この法律において、「児童虐待」とは、保護者（親権を行う者、未成年後見人その他の者で、児童を現に監護する児童（18歳に満たない者をいう。以下同じ。）について行う次に掲げる行為をいう。

- 1 児童の身体に外傷が生じ、又は生じるおそれのある暴行を加えること。
- 2 児童にわいせつな行為をすること又は児童をしてわいせつな行為をさせること。
- 3 児童の心身の正常な発達を妨げるような著しい減食又は長時間の放置、保護者以外の同居人による前2号又は次号に掲げる行為と同様の行為の放置その他の保護者としての監護を著しく怠ること。
- 4 児童に対する著しい暴言又は著しく拒絶的な対応、児童が同居する家庭における配偶者に対する暴力（配偶者（婚姻の届出をしていないが、事実上婚姻関係と同様の事情にある者を含む。）の身体に対する不法な攻撃であって生命又は身体に危害を及ぼすもの及びこれに準ずる心身に有害な影響を及ぼす言動をいう。）その他の児童に著しい心理的外傷を与える言動を行うこと。

つまり虐待とは、親または親に代わって子どもを監護・養育している者が、子どもに対して暴行、わいせつな行為、養育の怠慢、暴言・拒絶など不適切な扱い（maltreatment）を一方的に、しかもくり返し行い、子どもの心身を傷つけ、健全な成長・発達を妨げる行為をいう。

子どもに対する虐待の呼称として、行政用語としての「児童虐待」が使用されることが多いが、「子ども虐待」と呼ぶこともある。あるいは幼児期の子どもに対する虐待に限って、「幼児虐待」と言うこともある。なお、虐待を受ける子どもを「被虐待児（童）」と呼ぶ。

(2) 虐待の実態

① 虐待件数と推移

児童相談所で受付処理した虐待相談件数の年次推移は表1のとおりである。筆者は以前に児童相談所に勤務していて、平成4～5年に虐待の増加の兆しを感じていた。統計的には表1に見られるように平成7年頃から年々増加し、10年後の平成17年度は12倍の比率で増加している。平成19年度はさらに増え、40,639件にも及んでいる。

表1 虐待に関する相談処理件数年次推移（全国児童相談所）

年度	平成2年度	平成7年度	平成12年度	平成17年度
件数	1,101	2,722	17,725	34,472

（資料：厚生労働省「社会福祉行政業務報告」）

② 虐待の内容別内訳

虐待の内容別内訳は表2の通りである。身体的虐待が一番多く、41.2%を占める。続いて、養育の怠慢、心理的虐待が多い。

表2 虐待相談の内容別割合（平成18年度）

身体的虐待	性的虐待	養育の怠慢	心理的虐待
41.2%	3.1%	38.5%	17.2%

（資料：厚生労働省「社会福祉行政業務報告」）

③ 虐待者の内訳

虐待をする者の中で一番多いのが実母である。実母による虐待は62.8%を占める。実父による虐待は実母に比べて少なく、22.0%である。継父母では継母より継父による虐待が多い。その他は祖父母等による虐待の比率である。

表3 虐待者の割合（平成18年度）

実父	継父等	実母	継母等	その他
22.0%	6.5%	62.8%	1.8%	6.9%

（資料：厚生労働省「社会福祉行政業務報告」）

表4 被虐待児の年齢別割合（平成18年度）

0～3歳未満	3歳～学齢前	小学生	中学生	高校生他
17.3%	20.0%	38.8%	13.9%	5.0%

（資料：厚生労働省「社会福祉行政業務報告」）

④ 被虐待児の年齢

虐待を受ける児童は小学生が一番多く、ついで3歳～学齢前の幼児が多い。3歳未満児に対する虐待は17.3%、乳幼児の虐待は37.3%を占め、件数で9,334件、かなりの件数である。

(3) 虐待の種類

虐待の種類は一般的に身体的虐待、性的虐待、養育の怠慢（ネグレクト）、心理的虐待の4種類に分けられる。これらの虐待はそれぞれ単一に起きるのではなく、それぞれの虐待は同時に、あるときは心理的虐待、あるときは身体的虐待が行われるなど並行的、錯綜的に引き起こされる。次にそれぞれの虐待の特徴について簡単に記す。

① 身体的虐待

なぐる、ける、投げ落とす（放り投げる）、首をしめる、逆さつりにする、ふり回す（ゆさぶる）、風呂に沈める、タバコの火を押しつける、薬を飲ませて具合を悪くさせるなど身体面に損傷を与える不適切な扱いを身体的虐待という。乳幼児期の身体的虐待は無防備の上、小さいために暴行をもろに受けてしまい、大けがや後遺症、それに死に至る不幸な事件となることが多い。

② 性的虐待

自分の性的欲求を満足させるために性的いたずらや性的行為を強要する行為である。身体を触ったり、性器を見せたりすることも性的虐待である。実父、継父、知人など性的虐待をする者は大方、男性である。性的虐待の被害に遭われる年齢は5歳と13歳の二つの年齢にピークがあるとの報告があり、幼児期の性的虐待も少なくはない。また、男児に対する性的虐待事例もある。ただ、性的虐待は虐待（加害）者が子どもに対し、「二人だけの秘密だよ」「ママに話すとママに嫌われるよ」などと秘密を強要するために、発覚しにくいところがある。

③ 養育の怠慢（ネグレクト）

授乳をしない、食事を与えない、着替え・洗濯・入浴など身の周りの世話をしない、具合が悪くても医者に連れて行かない、子どもは危険が分からないのに子どもだけを車や家の中に置き去りにするなど健康を損ない、事故につながるような危険な状況が心配されるなど不適切な扱いが養育の怠慢（ネグレクトともいわれる）としての虐待である。なお、養育の怠慢には積極的怠慢と消極的怠慢とがある。積極的怠慢は、子どもにとってどういった世話が必要かを知っていながら、また、子どもに対して世話ができる状況にありながら、子どもの養育・世話を

怠り、拒絶する場合の虐待である。一方、消極的怠慢とは、親に知的障害や精神障害があり、無知や精神機能の低下のため子どもの養育・世話が十分行き届かない場合や、経済的理由で子どもに十分なかかわりができないなどの場合の虐待をいう。なお、子どもに与える心理的影響は、積極的怠慢に比べて、消極的怠慢の方は軽微ではある。

④ 心理的虐待

けなす・馬鹿にする・辱めるなどの言葉を発する、脅す言葉で怖がらせる、口をきかないなど無視する、他のきょうだいと差別する、無理な仕事や課題を強要する、などが心理的虐待である。虐待相談の内容別割合（表2）を見ると、心理的虐待は他の虐待に比べて多くはないが（17.2%）、なぐる、蹴るなどの身体的虐待をしながら、脅す、けなすなどの言葉による心理的虐待を加えることが多く、他の虐待と絡んで引き起こされることが多い虐待である。従って、被虐待児の多くは心理的虐待を受けている。しかも、心理的虐待は日常的に、長期に渡ってなされることが多いので、心的外傷（トラウマ）として子どもの心に深く影響を及ぼす。

（4）虐待の実例

〈事例：5歳男児〉

A男は保育園に通園している。欠席が多く、突然3～4日休む。園としても気になる子であった。お昼寝の着替えの際に、保育士がA男の肩にあざがあるのを発見した。どう対応したらよいか園として話し合っている矢先に、母親の顔にあざが見られたので、担任が勇気を出して「お母さん、顔どうしたのですか」と尋ねたところ、内縁の夫が子どもにも母親にも暴力を振るうことを話してくれた。内縁の夫と別れようと考えているとのことであった。園長先生も心配し、母親と時々話をするよう心掛けてくれた。その後、母親は内縁の夫と別れ、母子ともに虐待から解放された。

〈事例：4歳女児〉

M子が幼稚園から帰り、ポケットに自分のものでないポケットティッシュが入っていたので問いただしたところ、黙ったままだったのと、人の物を盗むようになってしまったら大変だと思い、母親は逆上してM子の頭を殴ってしまった。倒れて頭を打ち、けいれん発作を起こしたので、母親が救急車を呼び病院に入院させた。70日入院した。

M子の母親は大学に入学し、1年先輩の父親と交際し妊娠したため退学し、長男を出産した。長男が生後4か月のとき突然死症候群で死亡した（母親陳述）。その後妊娠したが、母親は子どもを育てる自信がなく、堕胎しようと考えていたが、祖母は子どもが生まれれば関係がまずくなっている夫との関係がよくなるからとの考えで、出産を強く勧めた。母親は気の進まないままにM子を出産した。祖母は母親が小学2年生のときに離婚している。祖母は職業を持っていたので、母親は親戚に転々と預けられ、周囲に気を使う寂しい生活を強いられた。親からの身体的虐待は

なかったが、母に甘えられなかった不満感情を持ち続けてきた。なお、M子は腕に先天的形態異常があり、このことで母親はM子の出産をさらに後悔することになり、出産を強く勧めた祖母への不満を募らせていた。しかし、強い祖母に不満と攻撃性をぶつけることができずに、M子に向いてしまったのかも知れない。

これらの事例のように、虐待行為はいろいろな状況が絡んで起きる行動である。

3 虐待、なぜ起きるか

(1) 虐待の背景

虐待はなぜ起きるのか、その背景として、親の問題、家庭の問題、それに子ども自身の問題などが絡む。次にそれぞれについて、問題点を述べる。

① 親の問題

- * 体調不良がある。
- * 心理的に不安定で、抑うつ気分支配されている。
- * 子どもは欲しくないとの思いの中で出産した。
- * 望まない性の子を出産した。
- * 子どもに可愛さを感じられない。
- * 性格的に未熟さがあり、自分のことで精一杯、自分の思い通りにならない子育てに苦痛を感じる。
- * 子育てに自信が持てず不安が強く、泣かれると自分が責められている気分が高まり、混乱してしまう。
- * 友人・知人・近隣との交流が乏しい（孤立）。
- * 親自身、親から愛された思い出がなく、厳しく育てられ、あるいは虐待を受けた経験を持つ。

② 家庭の問題

- * 実家（親）との関係がよくない（孤立）。
- * 友人・知人・近隣など周囲との交流が乏しい（孤立）。
- * 夫婦の関係がよくない。
- * 望まない結婚であった。
- * 夫が家事・育児に協力してくれない。
- * 離婚や再婚によるストレスが強い。
- * 経済的に困っている。

③ 子ども自身の問題

- *発達に遅れがある。
- *発達に偏りがある。
- *未熟児で育児に手がかかる。
- *病気があり、育て方が難しい。
- *身体面に形態異常がある。
- *顔がかわいくない（整っていない）。
- *手のかかる行動上の問題がある。
- *気むずかしさやこだわりの強さなど、育てにくさがある。

(2) 最近の子育て事情と虐待

県の教育・子育て電話相談の特別相談員を担当していて感じることは、お母さん方が子育てに心配と不安を持ちながら親をやっているということである。この最近の子育て事情の問題が虐待の増加、虐待の裾野の広がりとは無関係ではないのではないかと考えている。子育て中の親の特徴について述べる。

① 子どもとのかかわりに戸惑う親

- *子どもをどう叱ったらよいか、どこまで叱ったらよいか、また、子どもにどんなこと（遊び）をさせたらよいかなど、しつけの勝手が分からず戸惑っている親。
- *泣いて暴れるがどうしたらよいか、反抗的で言うことをきかないのはなぜか、子どもが親の思い通りにしてくれないのはなぜかなど、子どもの心や行動の特徴が理解できないで戸惑っている親。
- *嫌いな牛乳を飲ませないといけないのか、夜10時ごろまで起きているが何時ごろに寝せるとよいかなど、子育ての常識があいまいとなってしまったために戸惑っている親。

なぜ、このように子どもとのかかわりに戸惑う親が増えているのであろうか。次のような社会の変化によると考えられる。

- *核家族が当たり前の社会となり、社会の伝統的育児伝承が途切れてしまった。
- *夫も忙しい上に、子どものことや育児について夫も分からず、頼りにならない。
- *実家の親も働いていることが多く当てにできず、手助けしてもらうことができにくい。
- *近隣の付き合いが乏しく、相談できる人もなく、手助けもない。
- *少子社会の中で身近に子育ての実際を見、聞きする経験もなく、機会もない。

昔の親も最初から母親役が出来たのではないと思う。子育てを身近に見、聞き、家族や近隣から教えられ、手助けを受けながら母親となったものと思う。現代は、昔の親に比べて親に任せられる部分が多いので、子育てに戸惑う親が多いのは当然のことと思う。親のこの戸惑いが親を追い詰め、子どもの養育を感情的、不安定とさせている。このことも虐待の遠因になっているのでは

ないかと思う。

② 子どもへの愛情に不安を抱く親

* 指しゃぶりをする、私の愛情がたりないのでしょうか。(4歳女兒の母親)

* 子どもが幼稚園から帰ってくると気が重くなってしまう、子どもをかわいく感じられないで怒ることが多くなってしまう、私は子どもを産んでよかったのでしょうか。(5歳男児の母親)

このように子どもをかわいいと感じられない親、子どもに愛情を持てているのか不安を抱く親が増えている。なぜだろうか。

* 「子どもには親の愛情がなにより」「子どもに愛情をいっぱい注ぎましょう」などとの“愛情”を強調する育児書やインターネットの情報に振り回され、“愛情”の手ごたえが分からず不安となっているのではないか。

* 母親の外に仕事を持ちながらの子育ては、大変である。毎日が忙しく、心に余裕をなくしており、その上、子どもに十分手をかけられない不安全感と子どもに対する不憫さが親の子どもへの愛情が不足しているのではないかと不安を抱かせ、自分を責めさせてしまうのではないか。

* 夫婦の関係がうまく行っているかどうか。夫婦関係がよくなないと、子どもへの感情(愛情)に夫(妻)に対する不満感情が投影され、自然さが失われ、かわいいと思えなくなる。一方で、愛情過剰となることもある。

③ 虐待ではないかと自分に不安を抱く親(虐待不安症候群)

* 自分自身、冷たく、厳しく母親に育てられた。自分はそうなりたくないと思い、子どもを育ててきたつもりだが、自分も親のように子どもに冷たく接するようになってしまったのではないかと不安を持ってしまう。今は努力しているのですが…。(6歳女兒の母親)

* 体罰の多い家庭に育った。子どもを時々きつく叱ってしまう。買い物に行く時など留守番をさせてしまう。子どもが熱を出した時も病院に連れて行くのが、たぶん他のお母さんより遅いと思う。これではよくないですね…。(4歳と2歳の子の母親)

これらの母親のように自分は子どもを虐待しているのではないかと、あるいは虐待をしてしまうのではないかと不安を感じてしまうのはなぜだろうか。

* 被虐待経験のある親や厳しいしつけをされた経験のある親は、幼少期のつらい状況が思い出され、自分はそうしまいと過剰に思うあまり、加害の恐れを不安を強めているのではないか。

* 虐待が社会問題となり、マスコミも虐待問題を取り上げることが多く、虐待をする親は“悪い親”“親失格”と強調されているために、子育て中の親はそう思われては大変と考え、虐待に敏感となっているためではないか。

4 虐待、なぜ問題か

虐待の自験例から虐待はなぜ問題かを考え、述べる。

〈事例：4歳男児〉

言葉を発しない、声も出ない。やせ細っている。顔はまっ白、表情がなく、目はうつろ。動きはない。この事例は実母による虐待で、怒鳴るなどの心理的虐待と食事をきちんと食べさせない、外に一步も連れ出さないなどの養育の怠慢（ネグレクト）のケースである。母親は、この子のために私の人生狂わされてしまったと言う。母親は本児を物のように扱っているが体に傷はないので身体的虐待は否定できる。本児に知的障害がある。障害程度は、本来は中度であろうと推察できるが、現在の状態は重度である。家庭分離をして知的障害児施設に入所したが、虐待のダメージが大きく、発達は抑えられたままである。

〈事例：16歳男児〉

幼児期から体罰を受けて育てられた。小学生のとき、父親に言うことをきかないと殴られ、家に入れてもらえず街の中を徘徊するなどの問題があり、小学5年生の時に児童自立支援施設に入所した。施設では安定した生活を送れた。中学を卒業と同時に施設を退所し、家庭に戻った。家庭に戻り4日目、道路で高校生ににらまれたとの理由で、その高校生を殴りつけ、大怪我をさせてしまった。幼児期から小学生の時期に実父から受けた虐待の心の傷がなお癒されず、暴行事件を引き起こしてしまったと考えられる。

〈事例：23歳女性〉

社会に出る自信がない、自分はいつもいけないことをしているのではないかという不安につきまといわれている。自分は生きる価値がない、死んだ方がましと訴える。小さい頃、母親に厳しく叱られた、なぐられたこともあった。母親に甘えられなかった。この女性、幼児期に受けた心理的虐待と身体的虐待の心の傷にふり回され、青年期の今、自分を否定的、自罰的にしか見られず、何ごとにも自信が持てず、社会的接触を回避している。

児童虐待は時に尊い命を奪い、あるいは大怪我をさせ、後遺症を残す。しかし、死や大怪我が避けられてもこれらの事例のように幼少期に受けた虐待が、被虐待児の発達を抑え、心を深く傷つけ、その傷が癒されないまま、後々の生活を困難にさせている事実に触れ、児童虐待は被虐待児の心身への影響が甚大あることを考え、防止と対応には一層の力を注ぐべきであると考ええる。

5 虐待に気づく

児童虐待の防止等に関する法律の第5条に、児童虐待の早期発見についての規定がある。学校

の教職員（幼稚園教諭も含まれる）および児童福祉施設職員（保育士も含まれる）である保育者は児童虐待を発見しやすい立場にあることを自覚し、児童虐待の早期発見に努めなければならぬと明示されている。そこで、保育の場でのかかわり・観察を通して次のようなサイン・様子が見られた場合には虐待の可能性があると考え、速やかに対応を講じる必要がある。

(1) 園(所)の生活場面における観察

- ① 不自然な外傷（打撲、皮下出血・青あざ、火傷など）が見られる。
- ② 表情が乏しく、元気がない。
- ③ 笑顔が少ない。
- ④ 緊張していて、おどおどしている。
- ⑤ 大人の顔をうかがう。
- ⑥ 大人にベタベタと甘える。
- ⑦ 衣服や体が薄汚れている。
- ⑧ 小動物や虫などをいじめる、殺す。
- ⑨ 年下の子と遊ぶことが多く、面倒見がよかったり、威圧的だったりする。
- ⑩ 乱暴が時々出る。
- ⑪ 年齢にそぐわない性的関心や性的遊びをする。
- ⑫ 保育者に過度に甘える。
- ⑬ 何事にも意欲がなく、集中できない。
- ⑭ 食事（給食）にむらがあり、食べなかったり、大食いをする。
- ⑮ 突然2～3日欠席する。
- ⑯ 忘れ物が多い。
- ⑰ 親をかばう。
- ⑱ 親が迎えに来てても帰ろうとしない。

(2) 身体測定、着替え時における観察

- ① 衣服を脱ぐのを嫌がる。
- ② 不自然な外傷（打撲、皮下出血・青あざ、火傷など）が見られる。
- ③ 体が薄汚れている、体にあかがついている。
- ④ 皮膚のつやがなく、栄養状態がよくなさそうである。
- ⑤ 低体重、低身長である。
- ⑥ 体重、身長の変化（伸び）が少ない。

(3) 親とのかかわりにおける観察

- ① 保育者とかかわりを避ける。
- ② 子どものことについて尋ねても、話しながらない。説明が不十分である。
- ③ 「子どもは嫌い」などの言葉を発する。
- ④ 子どもを見る目が険しい。
- ⑤ 子どもと一緒にいても楽しそうでない。
- ⑥ 子どもと視線を合わせない。
- ⑦ 子どもとの身体的ふれあいが少ない。
- ⑧ 不自然にかわいがったり、物を買ってあげる。
- ⑨ 感情の起伏が激しい。
- ⑩ 潔癖や完璧主義のところがある。
- ⑪ 親同士の交流がない。
- ⑫ 外出を好まない
- ⑬ 子どもの衣服に比べて、母親自身の衣服が身奇麗である。

6 虐待にどう対応するか

児童虐待の防止等に関する法律の第6条に児童虐待に係る通告の規定が示されている。児童虐待と思われる児童を発見した者は、市町村の児童福祉担当課、福祉事務所若しくは児童相談所に直接、あるいは児童委員を介して通告する義務を課せられている。なお、ここで「児童虐待と思われる児童」と表現されている。つまり、虐待を確信できなくても、虐待と思われるたら相談も含めて速やかに連絡をすることである。通告先での調査により例えば虐待の事実がなかったとしても、責任を問われることはない。通告を受けた者（機関）は通告をした者を特定させるものを漏らしてはならない（同法第7条）と記載されており、相談した者の秘密は守られることになっているので、安心して相談する。また、通告は公文書でなくとも、電話でも手紙でもよいとされる。

ところで、虐待の気になるケースに対して、次の対応を考える。

- (1) 保育者は虐待のことで気になる子どもがいたら、速やかに上司（園（所）長、教頭・主任、）に相談する。
- (2) 園（所）内で当面の対応を検討する。その上で、市町村の児童福祉担当課、福祉事務所若しくは児童相談所に相談（通告）する。児童委員にまず相談するのもよい。
- (3) 相談（通告）の際、幼稚園・保育所として、また担任として子ども及び親に今、そして今後どうかかわるとよいか、指導を受ける。
- (4) 担任は虐待把握の経過と把握内容を記録しておく。その後の経過についても時系列的に記録をする。

- (5) 通告後は通告先と連携し、通告先の調査や指導に協力する。その上、通告先の指導を受けながら子および親にかかわる。
- (6) 虐待を受けている子どもに対するかかわりの基本は、虐待から護り、安全性を確保することである。その上、やさしく、ていねいなかわりを続け、受容を大事にして暴力で支配することをしないおとながいることを知る場を提供する。
- (7) 親にかかわる基本は、虐待に関して非難や批判をしないで受容的にかわり、支えることを大事にする。その上で、虐待は子どもに対する影響の重大性だけでなく、虐待する親自身も苦しんでいることを認識し、虐待の遮断を願う。そのために、通告先（市町村、福祉事務所、児童相談所）の指導のもとに、保育者として子どもの心のケアとともに虐待行為の解消のために親に積極的にかかわる。

資料１：児童虐待の防止等に関する法律（抜粋）

（目的）

第１条 この法律は、児童虐待が児童の人権を著しく侵害し、その心身の成長及び人格の形成に重大な影響を与えるとともに、我が国における将来の世代の育成にも懸念を及ぼすことにかんがみ、児童に対する虐待の禁止、児童虐待の予防及び早期発見その他の児童虐待の防止に関する国及び地方公共団体の責務、児童虐待を受ける児童の保護及び自立の支援のための措置等を定めることにより、児童虐待の防止等に関する施策を促進し、もって児童の権利利益の擁護に資することを目的とする。

（児童虐待の定義）

第２条 この法律において、「児童虐待」とは、保護者（親権を行う者、未成年後見人その他の者で、児童を現に監護するものをいう。以下同じ。）がその監護する児童（18歳に満たない者をいう。以下同じ。）について行う次に掲げる行為をいう。

- 一 児童の身体に外傷が生じ、又は生じるおそれのある暴行を加えること。
- 二 児童にわいせつな行為をすること又は児童をしてわいせつな行為をさせること。
- 三 児童の心身の正常な発達を妨げるような著しい減食又は長時間の放置、保護者以外の同居人による前２号又は次号に掲げる行為と同様の行為の放置その他の保護者としての監護を著しく怠ること。
- 四 児童に対する著しい暴言又は著しく拒絶的な対応、児童が同居する家庭における配偶者に対する暴力（配偶者（婚姻の届出をしていないが、事実上婚姻関係と同様の事情にある者を含む。）の身体に対する不法な攻撃であって生命又は身体に危害を及ぼすもの及びこれに準ずる心身に有害な影響を及ぼす言動をいう。）その他の児童に著しい心理的外傷を与える言動を行うこと。

(児童に対する虐待の禁止)

第3条 何人も、児童に対し、虐待をしてはならない。

(児童虐待の早期発見等)

第4条 学校、児童福祉施設、病院その他児童の福祉に業務上関係のある団体及び学校の教職員、児童福祉施設の職員、医師、保健師、弁護士その他児童の福祉に職務上関係のある者は、児童虐待を発見しやすい立場にあることを自覚し、児童虐待の早期発見に努めなければならない。

2 前項に規定する者は、児童虐待の予防その他の児童虐待の防止並びに児童虐待を受けた児童の保護及び自立の支援に関する国及び地方公共団体の施策に協力するよう努めなければならない。

3 学校および児童福祉施設は、児童及び保護者に対して、児童虐待の防止のための教育又は啓発に努めなければならない。

(児童虐待に係る通告)

第6条 児童虐待を受けたと思われる児童を発見した者は、速やかに、これを市町村、都道府県の設置する福祉事務所若しくは児童相談所又は児童委員を介して福祉事務所若しくは児童相談所に通告しなければならない。

2 前項の規定による通告は、児童福祉法（昭和22年法律第164号）第25条の規定による通告とみなして同法の規定を適用する。

3 刑法（明治40年法律第45号）の秘密漏示罪の規定その他の守秘義務に関する法律の規定は、第1項の規定による通告をする義務の遵守を妨げるものと解釈する。

第7条 市町村、都道府県の設置する福祉事務所又は児童相談所が前条第1項の規定による通告を受けた場合においては、当該通告を受けた児童相談所又は福祉事務所の所長、所員その他の職員及び当該通告を仲介した児童委員は、その職務上知り得た事項であって当該通告をした者を特定させるものを漏らしてはならない。

第12条の4 都道府県の知事は、児童虐待を受けた児童について施設入所等の措置（児童福祉法第28条の規定によるものに限る）が採られ、かつ、第12条第1項の規定により、当該児童虐待を行った保護者について、同項各号に掲げる行為の全部が制限されている場合において、児童虐待の防止及び児童虐待を受けた児童の保護のために特に必要があると認めるときは、厚生労働省令で定めるところにより、6月を超えない期間を定めて、当該保護者に対し、当該児童の住所若しくは居所、就学する学校その他の場所において当該児童の身辺につきまとうい、又は当該児童の住所若しくは居所、就学する学校その他その通常所在する場所（通学路その他の当該児童が日常生活又は社会生活を営むために通常移動する経路を含む。）の付近をはいかいしてはならないことを命ずることができる。

2 都道府県の知事は、前項に規定する場合において、引き続き児童虐待の防止及び児童虐待

を受けた児童の保護のため特に必要があると認めるときは、6月を超えない期間を定めて、同項の規定による命令に係る期間を更新することができる。

(児童虐待を受けた児童等に対する支援)

第13条の2 市町村は、児童福祉法第24条第3項の規定により保育所に入所する児童を選考する場合には、児童虐待の防止に寄与するため、特別の支援を要する家庭の福祉に配慮をしなければならない。

2 国及び地方公共団体は、児童虐待を受けた児童がその年齢及び能力に応じ十分な教育が受けられるようにするため、教育の内容及び方法の改善及び充実を図る等必要な施策を講じなければならない。

(罰則)

第17条 第12条の4第1項の規定による命令(同条第2項の規定により同条第1項の規定による命令に係る期間が更新された場合における当該命令を含む。)に違反した者は、1年以下の懲役又は100万円以下の罰金に処する。

「平12.5.24,最終改正 平19」

資料2：児童福祉法(抜粋)

(児童福祉の理念)

第1条 すべて国民は、児童が心身ともに健やかに生まれ、且つ、育成されるよう努めなければならない。

(児童育成の責任)

第2条 国及び地方公共団体は、児童の保護者とともに、児童を心身ともに健やかに育成する責任を負う。

(原理の尊重)

第3条 前2項に規定するところは、児童の福祉を保障するための原理であり、この原理は、すべて児童に関する法令の施行にあたって、常に尊重されなければならない。

(保育所での保育の実施)

第24条

3 市町村は、1の保育所について、当該保育所への入所を希望する旨を記載した前項の申込書に係る児童のすべてが入所する場合には当該保育所における適切な保育の実施が困難となることその他のやむを得ない事由がある場合においては、当該保育所に入所する児童を公正な方法で選考することができる。

4 市町村は、第25条の8第3号又は第26条第1項第4号の規定による報告又は通知を受けた児童について、必要があると認めるときは、その保護者に対して、保育の実施の申込みを勧

奨ししなければならない。

(要保護児童発見者の通告義務)

第25条 要保護児童を発見した者は、これを市町村、都道府県の設置する福祉事務所若しくは児童相談所又は児童委員を介して福祉事務所若しくは児童相談所に通告しなければならない。ただし、罪を犯した満14歳以上の児童については、この限りではない。この場合においては、これを家庭裁判所に通告しなければならない。

(福祉事務所長のとるべき措置)

第25条の8

三 助産の実施、母子保護の実施又は保育の実施（以下「保育の実施等」という。）が適当であるとみとめる者は、これをそれぞれその保育の実施等に係る都道府県又は市町村の長に報告し、又は通知すること。

(都道府県のとるべき措置)

第27条 都道府県は、前条第1項第1号の規定による報告又は少年法第18第2項の規定による送致のあった児童につき、次の各号のいずれかの措置を採らなければならない。

二 児童又はその保護者を児童福祉司、知的障害者福祉司、社会福祉主事、児童委員若しくは当該都道府県の設置する児童家庭支援センター若しくは当該都道府県が行う相談支援事業に係る職員に指導させ、又は当該都道府県以外の者の設置する児童家庭支援センター若しくは当該都道府県以外の相談支援事業を行う者に指導を委託すること。

三 児童を里親に委託し、又は乳児院、児童養護施設、知的障害児施設、知的障害児通園施設、盲ろうあ児施設、肢体不自由児施設、重症心身障害児施設、情緒障害児短期治療施設、若しくは児童自立支援施設に入所させること。

(保護者の児童虐待等の場合の措置)

第28条 保護者が、その児童を虐待し、著しくその監護を怠り、その他保護者に監護させることが著しく当該児童の福祉を害する場合において、第27条第1項第3号の措置を採ることが児童の親権を行う者又は未成年後見人の意に反するときは、都道府県は、次の各号の措置を採ることができる。

一 保護者が親権を行う者又は未成年後見人であるときは、家庭裁判所の承認を得て、第27条第1項第3号の措置を採ること。

二 保護者が親権を行う者又は未成年後見人でないときは、その児童を親権を行う者又は未成年後見人に引き渡すこと。ただし、その児童を親権を行う者又は未成年後見人に引き渡すことが児童の福祉のため不適當であると認めるときは、家庭裁判所の承認を得て、第27条第1項第3号の措置を採ること。

2 前項第一号及び第二号ただし書の規定による措置の期限は、当該措置を開始した日から2

年を超えてはならない。ただし、当該措置に係る保護者に対する指導措置（第27条第1項第2号の措置をいう。以下この条において同じ。）の効果等に照らし、当該措置を継続しなければ保護者がその児童を虐待し、著しくその監護を怠り、その他著しく当該児童の福祉を害するおそれがあると認めるときは、都道府県は、家庭裁判所の承認を得て、当該期間を更新することができる。

〔昭22. 12. 12, 最終改正 平19〕

資料3：里親の認定等に関する省令（抜粋）

（里親の種類）

第2条 里親の種類は、養育里親、親族里親、短期里親及び専門里親とする。

第5章 専門里親

（定義）

第18条 専門里親は、2年以内の期間を定めて、要保護児童のうち、児童虐待の防止等に関する法律（平成12年法律第82号）第2条に規定する児童虐待等の行為により心身に有害な影響を受けた児童を養育する里親として里親認定を受けた者とする。

（要件）

第19条 専門里親は、次に掲げる要件に該当する者とする。

一 次に掲げる要件のいずれかに該当すること。

ア 第9条の規定により養育里親名簿に登録されている者であって、養育里親として3年以上の委託児童の養育の経験を有するものであること。

イ 3年以上児童福祉事業に従事した者であって、都道府県知事が適当と認めたものであること。

ウ 都道府県知事がア及びイに該当する者と同等以上の能力を有すると認定した者であること。

二 専門里親研修（専門里親の認定を受けようとする者が必要な知識及び経験を修得するために受けるべき研修であって、厚生労働大臣が定めるものをいう。）の課程を修了していること。

三 心身ともに健全であること。

四 児童の養育についての理解及び熱意並びに児童に対する豊かな愛情を有していること。

五 委託児童の養育に専念できること。

六 経済的に困窮していないこと。

七 児童の養育に関し虐待等の問題をおこしたことがないこと。

八 法及び児童買春、児童ポルノに係る行為等の処罰及び児童の保護等に関する法律の規定により、罰金以上の刑に処せられたことがないこと。

〔平14. 9. 5, 最終改正 平18〕

資料4：保育所保育指針（抜粋）

第5章 健康及び安全

1 子どもの健康支援

(1) 子どもの健康状態並びに発育及び発達状態の把握

ウ 子どもの心身の状態等を観察し、不適切な養育の兆候が見られる場合には、市町村や関係機関と連携し、児童福祉法第25条の2第1項に規定する要保護児童対策地域協議会（以下「要保護児童対策地域協議会」という。）で検討するなど適切な対応を図ること。また、虐待が疑われる場合には、速やかに市町村又は児童相談所に通告し、適切な対応を図ること。

第6章 保護者に対する支援

2 保育所に入所している子どもの保護者に対する支援

(6) 保護者に不適切な養育等が疑われる場合には、市町村や関係機関と連携し、要保護児童対策地域協議会で検討するなど適切な対応を図ること。また、虐待が疑われる場合には、速やかに市町村又は児童相談所に通告し、適切な対応を図ること。

3 地域における子育て支援

(3) 地域の要保護児童への対応など、地域の子どもをめぐる諸課題に対し、要保護児童対策地域協議会など関係機関と連携、協力して取り組むよう努めること。

[平20.3.28,改定]

[参考文献]

- (1) 浅野房雄他 被虐待児童の施設措置事例 児童相談事例集 厚生省児童家庭局監修 平成6年
- (2) 浅野房雄 一人一人を生かす保育カウンセリングの理論と実践 明治図書 2009年
- (3) 岩田泰子 児童虐待の臨床的概念 精神療法 VOL25 NO.6 1999年
- (4) 柏女霊峰他編 子どもの虐待へのとりくみ 別冊「発達」26 ミネルヴァ書房 2001年